

読んでみたい  
この一冊

大阪産業経済リサーチセンター  
総括研究員 北出芳久



## 『国宝消滅 イギリス人アナリストが警告する「文化」と「経済」の危機』

●デービッド・アトキンソン著 東洋経済新報社 1,500円(+税)

著者は、ゴールドマン・サックスで金融調査室長を歴任、経済アナリストとして活躍する一方で、日本在住25年（執筆当時）、茶道裏千家に入門するなど日本の伝統文化にも深い関心を寄せ、遂には数多くの国宝・重要文化財の修復を手掛ける、業界最大手で創業300年余のわが国老舗企業の代表取締役となるという、異色の経歴を有しています。

人口減少による日本経済の衰退を救うためには、観光立国は不可避だとの本書の主張は、今やさほど意外性はないようにみえます。そのような中で本書が異彩を放っていると私が感じるのは、あえて日本の「伝統文化」や「職人神話」の内幕を「内部告発」したことにあります。その中で、筆者は落札制度や補助金制度等、日本の文化財行政の問題点にも鋭く切り込んでいます。

日本の文化財が利益を生み出さない上に、保護に財政負担を強いられる「コストセンター」的な存在になっているという本書の主張には、観光立国を目指す日本が乗り越えるべき本質的な課題の存在を深く印象付けるものです。

本書は、前半では特に著者の本業に関係する伝統建築を対象に、国際比較を交えながら日本の保存偏重の文化財政策に疑問を呈する内容となっています。また、後半では伝統産業における価格設定、分業制、職人文化等の問題点にふれ、伝統を特別視するあまり営業や情報発信という発想の欠如により、需要の減少への対応を誤っていると指摘しています。

外国人ならではの視点と、職人集団ともいえる企業のトップとしての実体験を土台とした考察は、率直であり、データを基にした国際比較は興味深く、かつ説得力を感じます。おそらく関係者からは厳しい反応もあろうことは予測済みで、日本の伝統文化の将来を思う強い気持ちから書かれたものと思います。私も調査の対象として伝統工芸品産業に長年接触してきましたので、思い当た

る点は少なからずあり、当該産業の振興のあり方を考える上にも大きな示唆を与えてくれます。

日本の伝統的なものづくりという限られた枠内での振興策は、生活様式が変化してしまった現代にあっては、日常生活において使用する機会が乏しいため、きわめて限定的な効果しか期待できなくなりつつあります。もっと視野を広げ、伝統的なものづくりが支える日本文化に関わる衣食住の様々な要素を結合させ、それが観光資源として光を放つようにしなければ、このままでは全国各地の伝統産業の多くは失われてしまうことが危惧されます。

確かに改革すべき点は、いろいろありそうです。ただし、よく「伝統は革新の連続」といわれますが、変えるべき点と変えてはならない点を間違えると、伝統は滅びてしまいます。その見極めが大切であることを、本書は主張しています。

辛口の主張もありますが、本書からは日本の伝統文化に対する深い理解と愛情を感じます。外国人の元経済アナリストの目と、日本の、それも伝統産業を担う当事者としての目という両極の立場にいる著者ならではの主張は、読者をひきつけるでしょう。そしてそれは、単に伝統産業や伝統文化のジャンルの話にとどまらず、観光産業とつながることによって、人口減少社会が進む今後の日本経済の行方を考える上で、避けて通れない論点を提示するものといえましょう。

### 【著者略歴】

デービッド・アトキンソン 小西美術工藝社社長。1965年イギリス生れ。オックスフォード大学日本学専攻卒業。ゴールドマン・サックス取締役を経て、文化財補修を手掛ける創業300年以上の小西美術工藝社に入社、現職。本作のほか『新・観光立国論』（山本七平賞受賞）など、日本経済の活性化に関する著作を次々発表している。